

立場のちがいをのりこえるために

名古屋大学 加藤 敏郎

「核データ」という用語は原子核の諸性質に関するデータと言うことであると思うが、この用語を用いる人（あるいは立場）によってその意味することが異なる。「核データ」という語を用いた雑誌として全世界的になじみが深いものに *Nuclear Data Sheets* と *Atomic Data and Nuclear Data Tables* がある。これらの雑誌の内容は主として原子核の崩壊に関するデータおよび原子核反応に関するデータ（Table の方は原子に関するものを含む）が殆どで原子炉の設計に必要な中性子関係のデータは少ない。一方 *USA National Nuclear Data Center*, *IAEA Nuclear Data Section* 等の核データに関する活動は、原子力開発からの要請を受けて、中性子関係のデータを中心に進められている。我が国でも本誌の編集部は原研の核データセンターであり、こゝでは主として中性子に関するデータの収集整理評価などの仕事をしておられる。（最近は中性子以外の分野の活動もしておられる。）一口に言えば理学的立場と工学的立場で意味することが異るとも言える。

この様に立場が異ると同じ言葉でも意味することが微妙に異ったり、また逆に同じ様なことであるのに表現がちがっていたりすることはしばしば見られることである。しかしそのために専門が異ると議論がかみ合わないことが多い。また相互の交流をさまたげ理解し合う機会を少なくしている。とくに我が国では世界でただ一つ原爆の洗礼を受けた国であるために原子力アレルギーがあり、そのためかどうか知らないが伏見先生が原子力学会誌の20周年記念号に書いておられる様に、原子力開発の初期に核物理研究者からの積極的協力を得られないまゝに出発するなどのことがあって基礎分野の人達と原子力開発に携わっている人達との間の交流が諸外国に比べて少ない様に感じられる。共同利用研究所の利用者の顔ぶれを見ても原子炉の利用者と加速器の利用者とは割合とはっきり区別することが出来る。わずかに核分光学あるいは核化学関係者が線源作りの多様化を求めて両者にまたがって仕事をして来たと言える。

さて話をふたゝび核データにもどすとこの分野でも中性子の分野の人達とそ

れ以外の分野の人達との間の交流は比較的少なかった様に思う。そのために核物理屋の核データの収集（必要ならば測定することを含む）と評価に対する認識と理解は不十分であった。幸いにしてシグマ委員会には数年前から燃料計量部会が発足し核構造の研究者も多数参加し、また核構造データを中心とした核データ研究会も開かれる様になった。この様な交流は核物理屋に精度の良い測定値はそれ自身が重要な意味を持つことを認識させる機会を与える。私のさゝやかな経験でも精度の良い測定をおこなうことはそのこと自体が研究テーマとなることがわかった。

この様な相互の認識を深めるための場として、また核データに関する仕事（収集、評価の仕事にもそれなりの独創性が要求されることを強調する意味でも）を発表する場としても吉沢先生（広島大）、相山先生（東北大）の提案された核データ専門誌は重要な役割を果たすのではないだろうか。

また別の視点で眺めると新しい評価値、測定値の公表のみならず評価、測定の過程そのもの、たとえば日本が世界に誇る JENDL の作成過程において発生したいろいろの問題点とその解決策などはそれぞれ一つの研究論文となり得るもので公表を期待している者、あるいは公表の場を深めている人も多いのではないかと推察する。またその様な創意工夫が論文になることで大学院在学中の若い人達にも核データの仕事に参加する意欲が生まれ、そこから大学と研究所の立場のちがいを理解し合い更により良き協力体制が作られ今後この分野の活動に活力を与えることになるのではないかと思う。この意味でも両先生の御提案を推進したいと考えている。